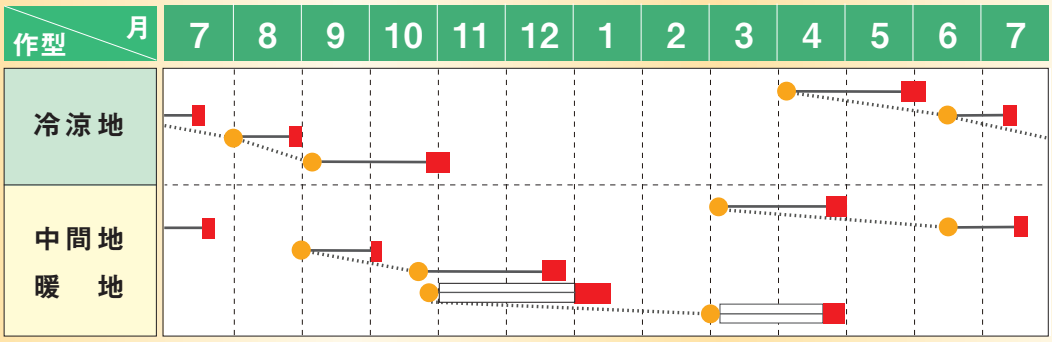
タキイのコマツナ栽培マニュアル



適期表記号説明

- ●：タネまき
- ―：生育期
- ▭：ハウスまたはトンネル被覆
- ■：収穫期
- ●：適宜播種可能

コマツナの発芽と抽苔

発芽適温　20～25℃

発芽できる温度は5～35℃と幅広く、低温でも比較的発芽しやすい。発芽適温の20～25℃では播種後2～3日で発芽しますが、低温だとこの2～3倍の発芽日数を要します。

↑コマツナの発芽

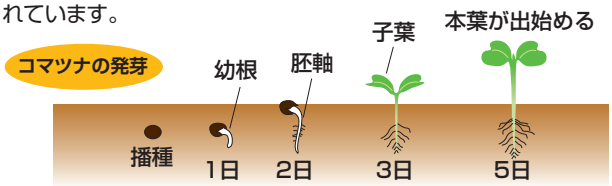
生育適温　15～25℃

生育温度は5～35℃、耐寒性は強く、0℃前後になっても枯死することはありません。トンネル・べたがけ栽培によって、冬季でも栽培することができます。また、暑さにも比較的強いので周年栽培が可能です。

↑コマツナのタネ

[コマツナのタネ]

種子は、ほぼ球状で直径約1～2㎜程度の大きさです。種子の大きさは品種によっても異なり、いずれも胚乳をもたず、栄養分は子葉に蓄えられています。



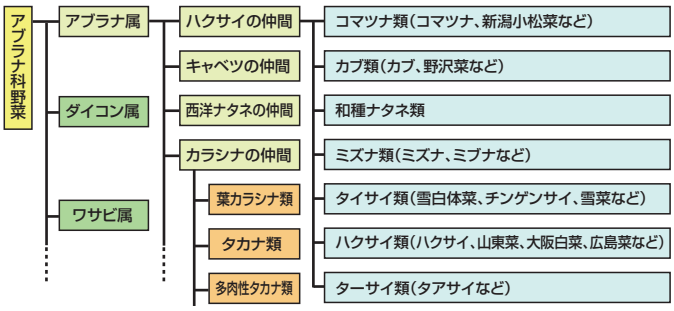
[コマツナの花芽分化]

種子が吸水し、発芽したころから低温感応しますが、日長にはあまり関係なく、発芽直後からの13℃以下の低温にある一定期間程度遭遇すると花芽ができてきます。このため、晩秋からの低温期の栽培では、ハウスやトンネル栽培などで積極的な保温をしないと、大きくなる前に早期抽苔してしまいます。本葉4枚くらいまでは、被覆資材を利用し5℃以上に管理するようにしましょう。

↑コマツナの花

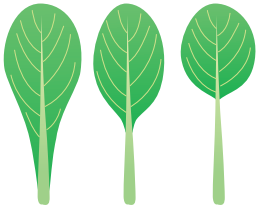
アブラナ科の分類とコマツナ

[アブラナ科アブラナ属の分類]



[コマツナの品種]

コマツナは江戸時代、小松川村（現在の東京都江戸川区）に順化したツケナ（葉物野菜）の一種で、当時からやわらかく味のよいものとして評判でした。カブの祖先に色々な種類をかけあわせてできたと考えられており比較的、根が太いのはそのためです。地域によって冬に収穫する甘いコマツナを冬菜、雑煮菜、春のやわらかくあざやかなグリーンのものをうぐいす菜と呼ぶ所があります。関東地方、特に東京近郊で市場出荷用に栽培されていましたが、近年栄養価や栽培性が高く評価され、広く全国に普及しています。



有袴型　中間型　無袴型

コマツナ葉の形状

葉の形状は、品種によって無袴型、中間型、有袴型の三つのグループに大別できます。無袴型とは、葉が丸葉で葉柄に葉身の袴（はかま）がついていないものを指し、有袴型とは、葉柄の付け根まで葉がついているものを指します。ただし、葉の形状は、同じ品種でも気温が高い栽培時期は無袴型へ、低温期は有袴型になりやすい傾向があります。
一般に固定種は有袴型が多く、交配種は無袴型か中間型になります。

[タネまきのポイント]

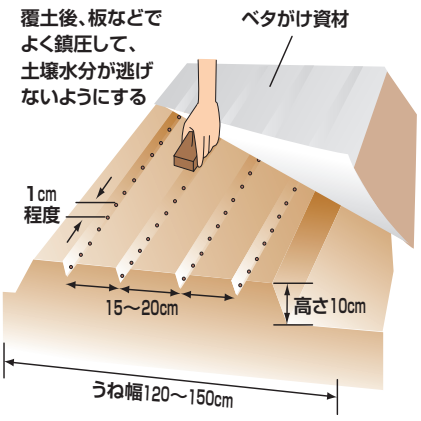
畑は極端な粘土質土壌を除き、ほとんどの土壌で栽培可能です。コマツナは栽培期間が短いので、整地された均一な圃場で一斉に発芽させ、生育を揃えることが大切です。バラまきするよりは条まきで1㎝ぐらいの深さのまき溝を切って種を1㎝間隔ぐらいにまく方が、間引き時に作業しやすくなります。
発芽までは土壌を乾燥させないようにし、晩秋～春まきはベタがけ資材を被覆して保温し一斉に発芽させるようにし、夏まきは遮光・遮熱資材を利用して高温と乾燥を防ぎ発芽を安定させるようにしましょう。
一度にたくさんまかず必要な量だけを期間をおいて「段まき」しておくといつでも食卓を楽しませてくれます。コマツナは株間を広くするほど大株になり、品質もよくなります。

施肥量

軟弱野菜を栽培する場合には特に土づくりが大切で、10㎡当たり20kg程度の完熟堆肥を施します。施肥量は10㎡当たり成分量でチッソ150～200g、リン酸、カリはそれぞれ100～150g程度としますが、前作によっては肥料分が多い場合があるので、残肥を考慮して肥料分を減らします。

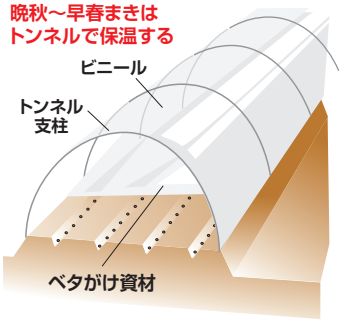
播　種

播種後は、乾燥や強い雨などを防ぐために、ベタがけ資材などを利用するとよいでしょう。



晩秋～早春まきのポイント

晩秋からの低温期の栽培では、トンネルやベタがけ資材などで保温しないと、大きくなる前に早期抽苔する恐れがあります。本葉4枚くらいまでは、5℃以上を目安に管理するようにしましょう。



コマツナの生育

コマツナ秋まき（9月まき）栽培

生育適温　15～25℃
（比較的暑さや寒さに強く、周年栽培が可能）

本葉展開

間引き２回目

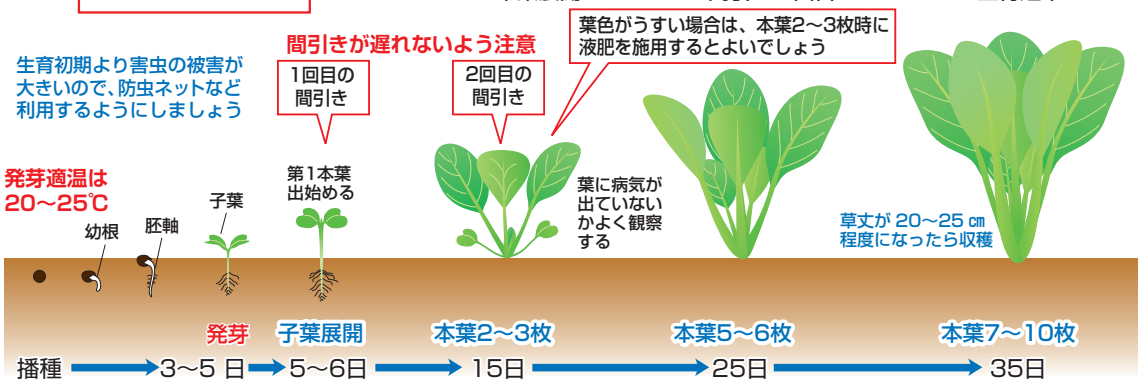
生育途中

収穫期

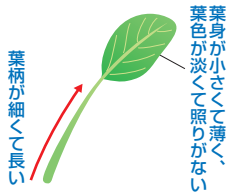
生育初期より害虫の被害が大きいので、防虫ネットなど利用するようにしましょう

間引きが遅れないよう注意

葉色がうすい場合は、本葉2～3枚時に液肥を施用するとよいでしょう



一般に密植するほど日当たりが悪くなって葉数が少なくなり、葉柄径、葉面積が小さくなります。高温や多湿が加われば軟弱徒長し、品質を著しく低下させます。



間引きと管理

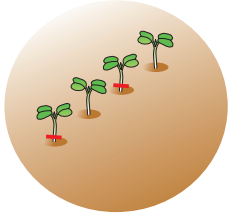
コマツナは光を好むので、株間を広げると大株になり、品質も向上します。したがって、葉と葉が触れ合うタイミングで間引きを行い、遅れないよう注意しましょう。

[間引き（1 回目）]
子葉が展開したころ、厚まき部分を間引きします。子葉の形が正ハート形のものを残し、大きすぎるものや小さいものを優先して間引きます。

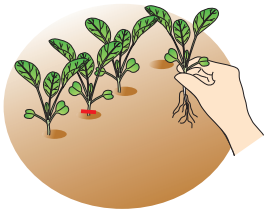
[本葉 2～3 枚（最終間引き）]
播種後 15 日くらいすると本葉が 2～3 枚展開し、この時期の生育の良し悪しで、栽培の 8 割が決定されます。この時期に収穫までに出る葉（本葉 8～9枚目まで）が生長点に分化し終えているからです。間引きはこの時期までに行わないと、コマツナは光不足となって軟弱徒長してしまいます。株間を 4～5 ㎝になるように最終間引きを行います。

[追肥と潅水]
肥料は元肥のみが基本ですが、肥料不足のときは本葉２～３枚期に速効性肥料（液肥）を追肥、潅水し、旺盛に育てます。多湿になると軟弱徒長しやすく、病害も発生しやすいので、原則として潅水は本葉３～４枚（草丈約 10 ㎝）までとします。生育後半は土壌を乾き気味に保ち、病害や軟弱徒長を防ぐようにします。

1回目 子葉が開いたとき


株間2㎝程度に間引きする

2回目 本葉2～3枚のとき


最終株間は4～5㎝程度

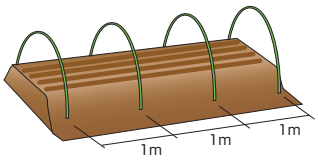
本葉7～8枚（収穫前）

防虫ネットの使い方

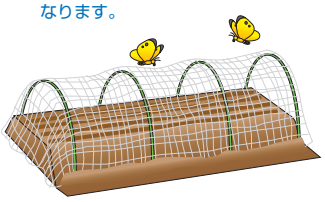
[畑の準備] うね立て前に土の中の害虫を駆除しておきます。夏場であれば、太陽熱消毒などがおすすめです（畑に散水し、透明ビニールで被覆する）。作物にあった肥料を入れ、うねを立てます。※土の中に害虫が残ると、ネットを張った後に駆除しにくくなります。

●タネまき
平らにうねの表面をならし、タネをまきます。その後、水をしっかりとやります。

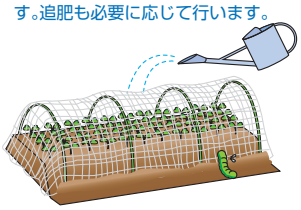
●トンネル支柱の設置
トンネル栽培用の支柱を用意して、約 1 m 間隔でうねに立てます。
※植え付け、タネまきしたら、すぐにネットをかけるのがコツ。



●防虫ネット設置
パッカーなどで支柱とネットをとめます。ネットのすそがめくれないよう、マルチどめや U ピンなどでとめたり、土を被せておさえるとよいでしょう。
※隙間があると、害虫が侵入しやすくなります。

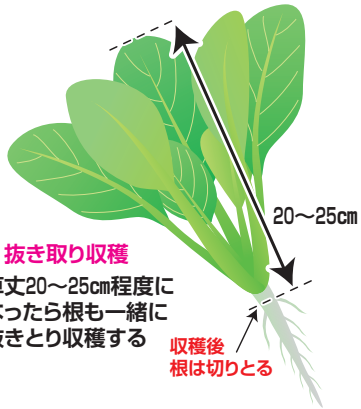


●ネットの上から潅水できる
一度ネットを張ると、収穫まではほとんど張りっぱなしで大丈夫です。透水性、通気性がよいので、ネットの上から散水できます。
※タネをまいて芽が出たら、一旦ネットを上げ、間引きをして株間を調整します。追肥も必要に応じて行います。



収　穫

生育日数で高温期で20～25日、低温期では70日以上となります。株重も高温期に比べて低温期の株が1.5～2倍近くなります。収穫適期幅は、高温期で2～3日間、低温期では10日以上になります。



収穫適期のコマツナ

収穫が遅れると（30㎝以上）繊維質が強くなりすぎ、食味が低下するので注意。

コマツナの病害と生理障害

[白さび病] 純寄生菌（糸状菌）で、初め葉の裏面に白色でいびつな小斑点が生じ、病斑部の葉の表面は退緑し、周縁が不明瞭な黄色の輪紋となります。秋口や春先、多雨の年に多く発生します。発病した場合は殺菌剤を散布し、早期防除に努めます。

[萎黄病] 土壌伝染性病害で、フザリウム菌（糸状菌）によって生育全期間に発生します。葉脈が網状に黄化し、生長につれて奇形化し、主根の維管束が褐変して枯死します。発病適温は 26～30℃と高温で発生が多くなります。土壌が本病原菌の汚染を受けると、連作は難しくなります。

[カッピング] 高温乾燥下で養水分が葉縁まで行き渡らず、葉縁の生育が抑えられ葉が全体的にカップ状に反る症状になります。時期や品種によって発生状況に差が見られます。